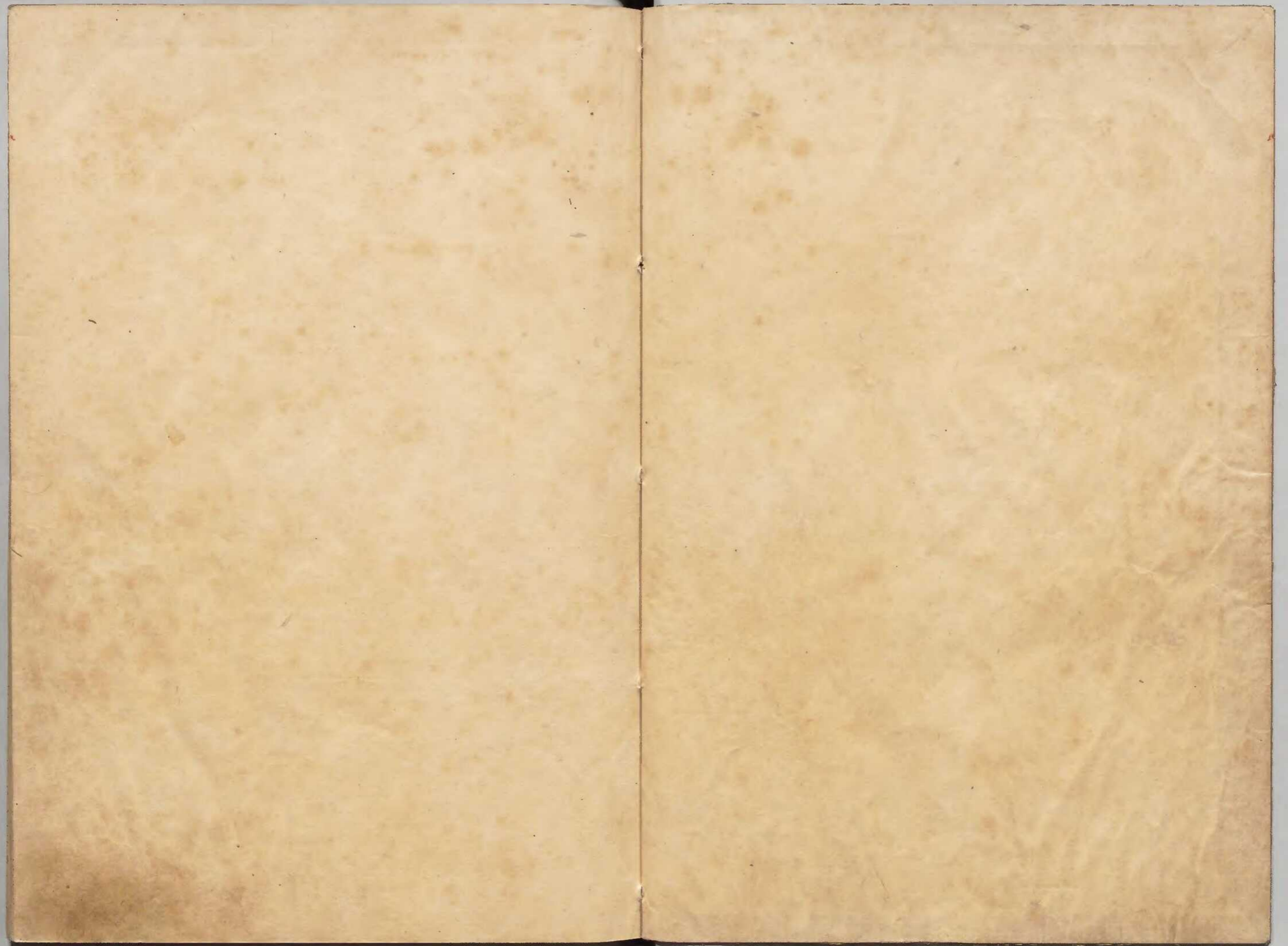


寛永諸家譜

清和源氏庚八冊之内
義光流之内武田流

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186 (40)	
函號	特 76	1





五鴻 保回
 岡田 芳根
 平願 小伝子
 卜方根 安友
 東條

寛永諸家系圖傳

信和源氏

庚申

義光流

五鴻

淺草文庫

家傳より武回太郎信義が男
 長孫有義が末流より代々肥前
 巨瀬より千敷百町と領とる此
 たり武回義政が次男盛が代々武回と
 りにあり字久肥赤と号し

今葉より枝家の系名活和より
有義より有義より五河孫右衛門
豊次よりいりて二十五代及びより有
義の頼朝頼家の代よりいりて
既原京特じりんの時^{有義と人将}
とらんといけども事なりとも系
時減之して有義ありを没と志り
とばそれ子孫の^{いりて}いりて
りまれども他家の系名とこれを

りんぐり^{いりて}頼朝の時代よりいりて
系の教^{いりて}よりいりて二十代よりいりて
十六七代よりいりて二十代よりいりて
いりてや^{いりて}十代よりいりて
一^{いりて}一字といりて又二字
よりいりて一字二字よりいりて
いりて一代よりいりて二代よりいりて
代より^{いりて}早世よりいりて十代よりいりて
死して一子といりて死せざる河いりて

● 盛定

代敷より所領何ぞも取りしんや
是より盛定より前の四十餘代
に及ぶれど

守久入初守

法名松月

純定

法源守

法名作親

純亮

石馬精

法名宗辰

純玄

五河入初守

初より五河より所領と
言舞陣の時守久とわたりし
と号し 法名子峰

豊利

清治

長八年伏見におわく

東照大権現と拝しやうとされしけり

多年に江戸より勤王

日十七日父の家督と許しお礼

同十九年御命より後五位下

叙せり

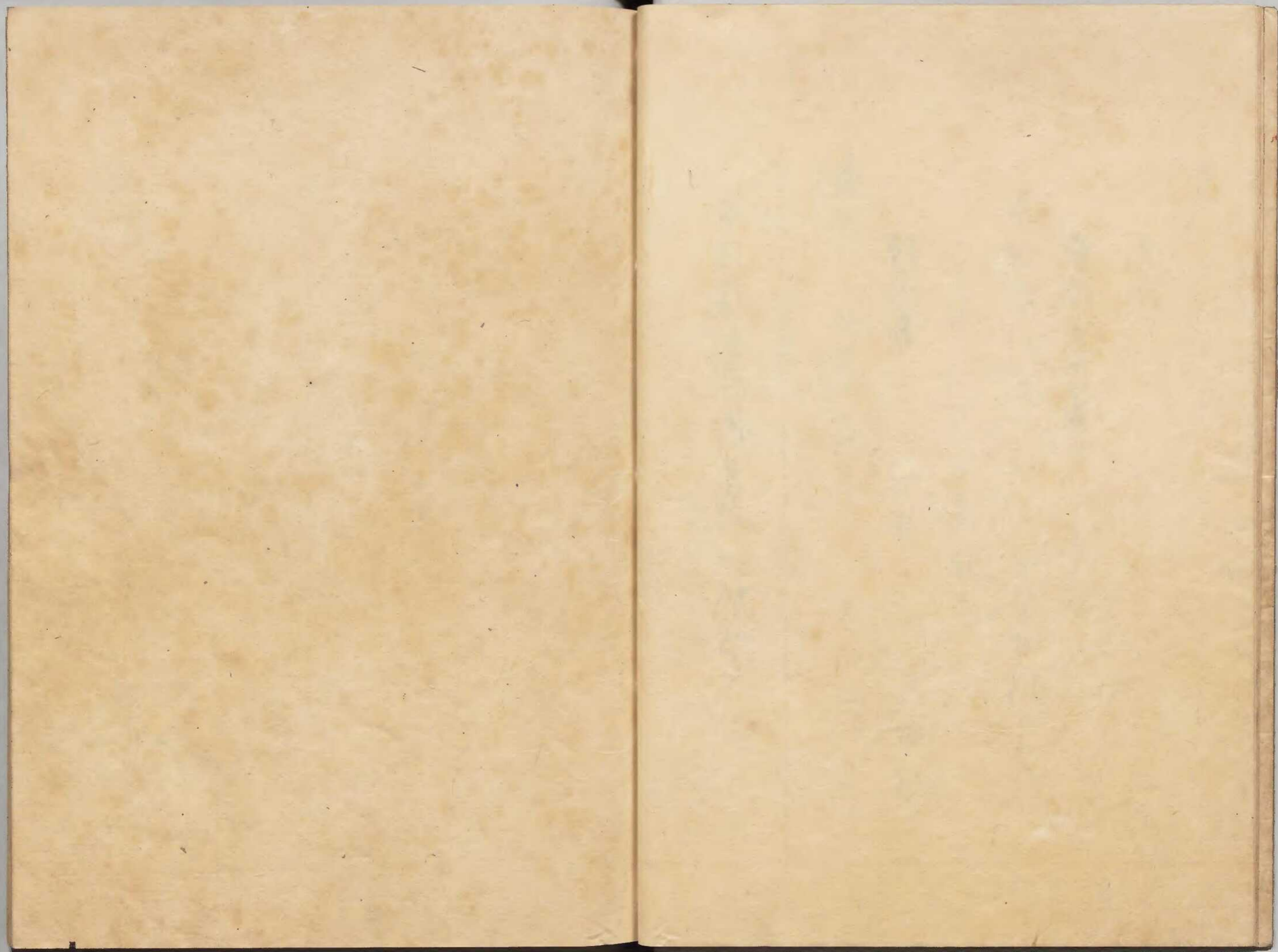
元和三年

名酒院殿此御茶印と以て裁

豊次

孫次郎

家紋武田菱



信和天皇七代孫

● 義光

新孫之郎

常陸守

保回

初ハ安回後ニ保回と稱ス

義清

武回冠者

刑部之郎

清光

逸見冠者

義定

安田二郎 遠江守

源頼朝 御所之人之忠厚也

吾永之月 二月七日 源九郎義經

所一谷 於此 就切

忠義

二郎 遠江守

忠炎

二郎 長束尉

忠則

太郎 長束尉

忠宗 ちゅうしゅう

保田太郎 たけのたろう 法名女道 ほむなむち

紀州吉田郡保田の庄と領地とを以て
又女道と保田とありし心

宗重 しゅうじゅう

権頭 ごんづ 紀州吉田郡湯淺の城に任じ
文永中禁裏火事の時宗重士

卒と引おくるや禁中へ召つけり
火とあやぐり此忠切より友信す
いと此人十六葉の〜菊井御紋と
建武元年正月二十九日歳を死す
法名宗傳

重定 しゅうてい

五郎左衛尉 法名宗尊

紀州久原土居の城に任す

重高 しげたか

又右郎 法名宗玄 任不田か

宗定 むねさだ

五郎長清尉 法名庭柏
河州富山より一軍切あらしより河
州のより俱永庄参回四ヶ村をか治

一知る家

宗弘 むねひろ

太郎長宗尉 任不田か
明應元年二月八日死す時八十七歳
法名法道

長宗 ちやうしゆん

山城守 紀州七山城に任す

天文二十二年八月二十一日八十二歳
病死 法名宗隆

知宗

依今 紀州在田郡八幡山の城に
そはら依久召玄蕃元養子とす
然るに依久
天正中 紀州志保に嶽合戦あり
討死

宗隆

法名無名 道号快僧
高野華王院の住持あり
實の知宗弟 依久の
又和人の名をよみしと保田の名と
和川の内 竹田 宇麻呂 大久保 第地
松山 二階堂とくくはる

秀長久子六月十日。六十九歳。病死

別京

甚長侍

伊州名張郡四徳野城

任寸

又禄え申秀長の御よりて榮也

家督とつご保田の庄とて

加京が婿とて

同年秀長よとていして肥後の名護屋

より

秀長三年秀長逝去の時遺言して

家老の所懐也とて

日十一月九月城列といふ事

神く

東照大権現と稱し

小湯原宿

泊命とてけし

則家一始小

同年 上使として母儀の徳山一いつる

同十九年十月下 仁命よりあはれ

御使者とある

同日十二月四日 京都よりおわく四十六歳

死を はな 宮庭利白

宗書

喜長未討

母ハ楊井和泉守友原家一が女家一也

秀吉よりはくんとて我切あり

元和二年三月十日 神く

大権現と稱しあり 均命よりそ剛

宗ノ孝徳と領地を

同三年

名酒院殿御上洛の時伏奉と

同五年同九年

名酒院殿御上洛の時伏奉

寛永三十四年十一月

將軍家御上洛のとき侍を

月十七日 御命よりして 御宿元御

他事の奉行とす

家紋 追例流

号回 とふ

号回の事流号回の冠者親義の後
流 なり

● 利長 りちやう

隼人 七回信州 後よ伊豆小佐と

利依 りい

依左衛門 七回信州

重法しげは

淡路守あわづのり

上じやう武藏むさし

寛永十五年

台酒院殿と御湯いひ一い寺てらと云い後

將軍家へ侍人しやうじんと云い侍しやう人にん

寛永十年 御命ごのみことより侍しやう人にんの御ご命のみこと

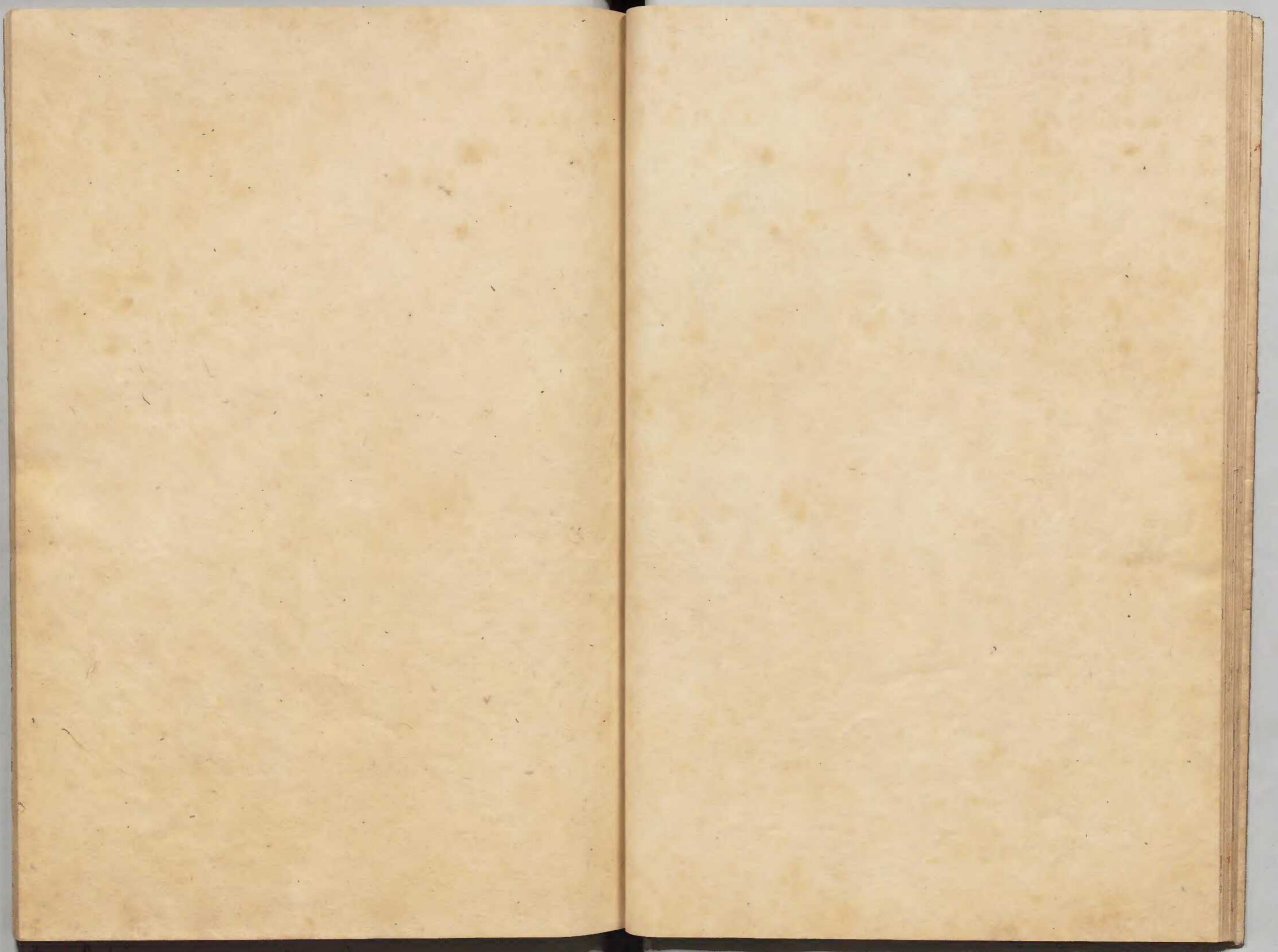
と云い侍しやう人にん

同十一月 従したが又また位ゐ下げの叙ぎよ一い地ぢと云い後

利重りしげ

太郎左衛門

家紋竹丸の内いけもんと云い後



● 利根

畧回

太郎左衛門 牛國伊賀

織田信長より命じて皆河村の城より侵す

信長の戦場より列して志をく軍切あり

信長明智がく先より裁でまゝ後織田

信雄よりついで利根よりびよ子利次勢

明新徳の御后より

東照大権現乞しきうりて并侍部

少将並改命とほくく利治と

御前より出た御物と手後

名徳院殿よりけりきくまら侍

元和三年五月二日に戸を病死

七十六歳は名徳下

利次

隼人

信隆よりきくし御明新徳の御后より

その後か有る大納言利家よりいふに

利常より

寛永六年五月十九日に戸を病死

歳六十六は名了法

利永

太師右衛門

永長十九年十月

名瀬院殿と御一筆

元和元年中興よりほろ

月六日六百五十二名の地と給

同九年御少姓組の番とつとむ

寛永九年

將軍家よりつとむる御中興院番と御

進物の小番とたり

同十年御加増の末地と御領と

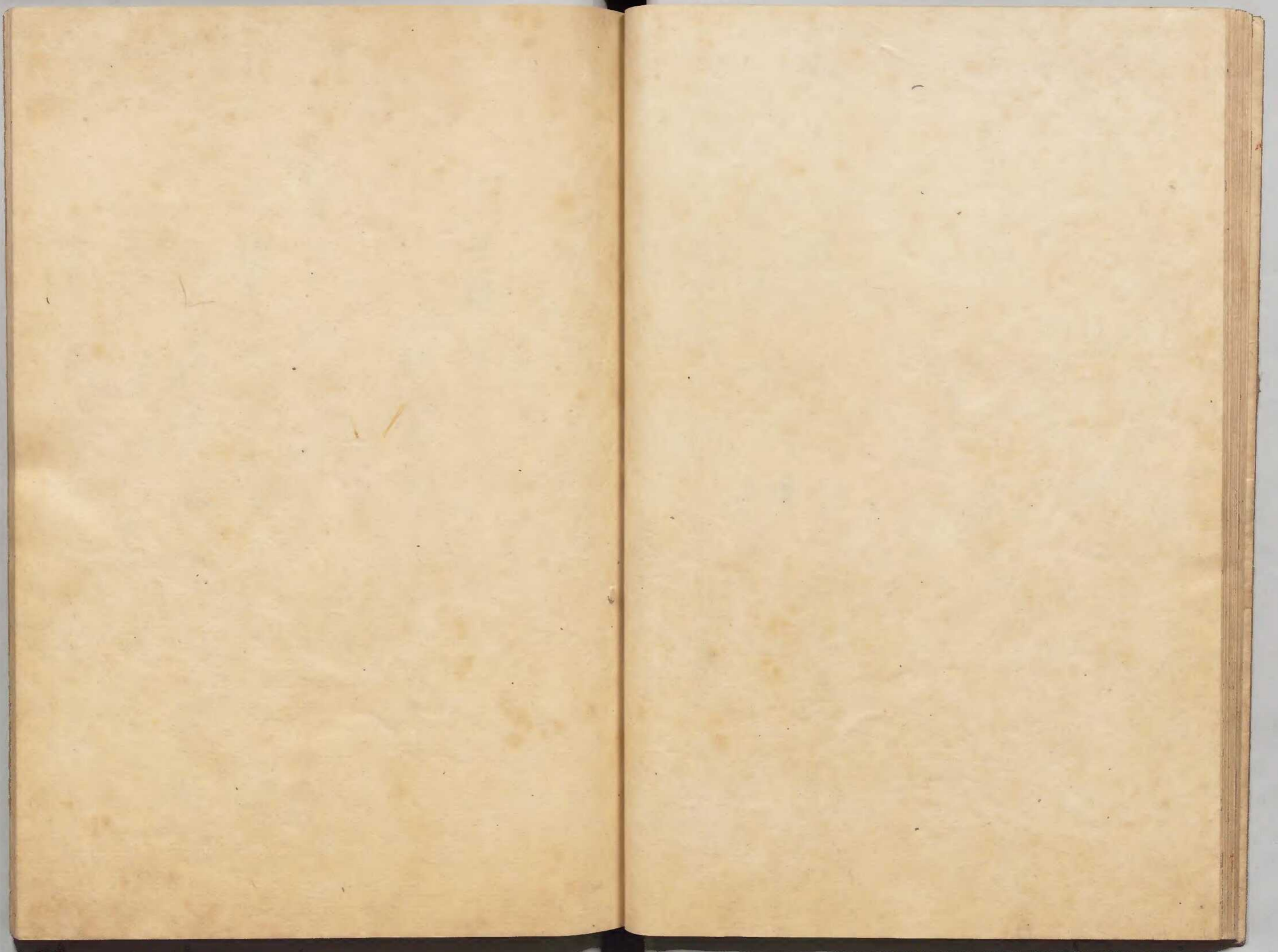
利昌

内記

利直

之概

家紋三日月鳩



● 定次

勇根

うれ先甲州武田の一族なり

孫去書

生甲後

初武田信虎の房一うれら浪人として

後明のゆき今川義元の子

六十二歳に病死 けふ宗玄

長次

孫左衛門 七國後河

東照大権現を別後寺より御府より甲

別と告と別と人ともよとよと長次いそつな

心とと通ととちりゆへ後河入水の

時石出さる

大権現河東河入國のとき侍臣の代友

とけけ給りりりりり後河山あゝの代友と

家次

源左衛門 七國河

台徳院殿より後へちりて代官職を補せり

大坂の陣のとき侍

四十七歳とて病死 是名津飲

若次

源氏遠 七小伊豆

台 德院殿は修之なる

号長十九年の冬大坂御陣は供奉

元和名は神く食禄をたまふ

同年大坂御陣のとき供奉

同三年同五月御入洛はまゝごひなる

同九年御上洛のとき京都より参り

所役より越前少将よりしきり同殿

を〜びは松平誠後が長主にてまゝごひ

江戸は御所

同十年十月廿多上御介正純少勘元より

御所より御由利下配流の時去次等

上使として後地より下向して正純と同大

使より所一病く由利の領内岩城忠次郎

六郷寺殿仁發保寺殿三人が領の末地

とわ〜る免を此事をゆた〜と江戸は

御所

寛永三〇年御上洛の供奉

同七年 作しらるくる同東の徳と巡る
檢し

同日同東の御勘定奉行と成る食す
祿の加へつとねんしららる英令を
差干しとたまふ

同年上方へ入る

將軍家の位は依り五歳の内にいはれし

巡る檢し

同年東地へ移す

同十一年松平中務大輔忠知卒す去る

上使として伊豫守に赴き更務と仕はたす

同十二年松平隠岐守に伊豫守伊豫守に

おわり知りおねんの時に衣次等被り地は何れ

くも領地としららるけし領地は何れ

同十二年 上使として増しりし

一柳監油が進出の地と仕はたす

同年御勘定の勘定奉行となる

同十二年 評定衆の内には入られて

民間の所縁とありきく
同十八年米地の山加増と給りて部令
ニ示すと領とそれ上承き 上意とり
より多年御事と勤め職役とこと
らざりけり 御感よありき
日十九年御事 仰とより御金の
租税をいひは 賦穀出入用持等御事
と裁判と

長
孫

源孫 七回武孫

寛永七年

將軍家と御賜 御事と御事
御事とつと心 御事と御事

長
正

五郎孫 七回月あ

寛永十六年

將軍家と相一^いなりとく^い川小姓此^い但書

い

い
久

八左衛門

七回日所

家^い波丸の内^いた^い三^い巴

集 あつ

忠次あつが實まこと父ちちなり

● 長次 ながつ

孫まご名な清きよ

代友しろともの手てと勤つとじ

名な根ね

先祖せんぞのり源げんは忠次あつと同一

家次

源兵衛

代友のつとむ初七

忠次

半左衛門

牛小相判

實ハ家次が兄の子なり忠次知少しんせう也

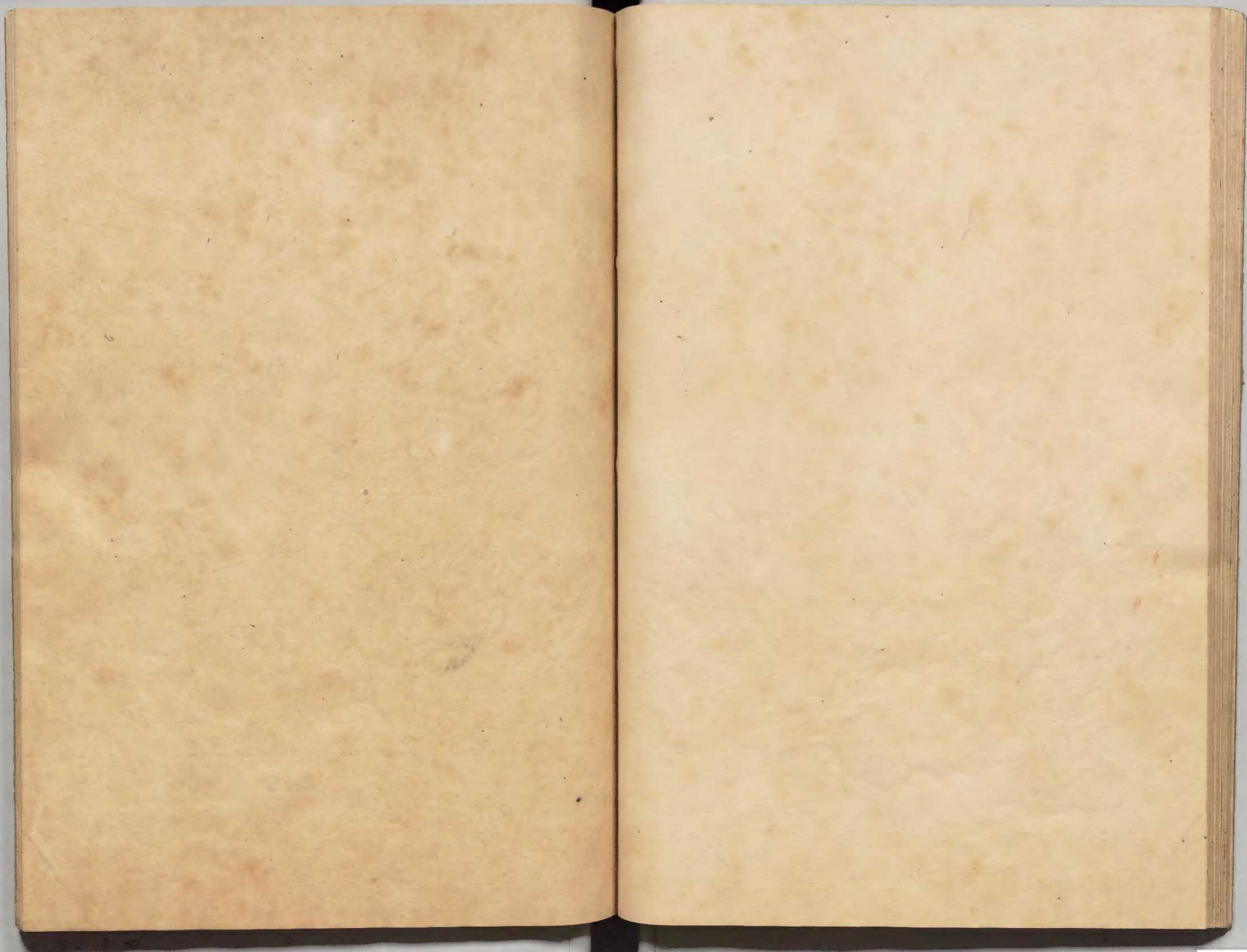
又病死ゆへ家次よりなりてなりて子也

つとむは上同じやうどうは通とほりてえ和み也

右出立也

右軍家よりしるなり

家次丸の内より三巴さんぱ



平願

● 忠次

武生藩

生國三列

東照大権現

一石知事

存福

と後

命より忠告

了子 卒六歳

忠務

三五島

生國三列

号七

大権現（石）にたれおのりてくたつ

とくらのちがひあるまじり小十人

と後

名誼院殿へけし人なり小腰均正春と初じ

威ふ十人く死を法名

定次

小左馬

七圓月

実の飯田の島を子なり忠節が

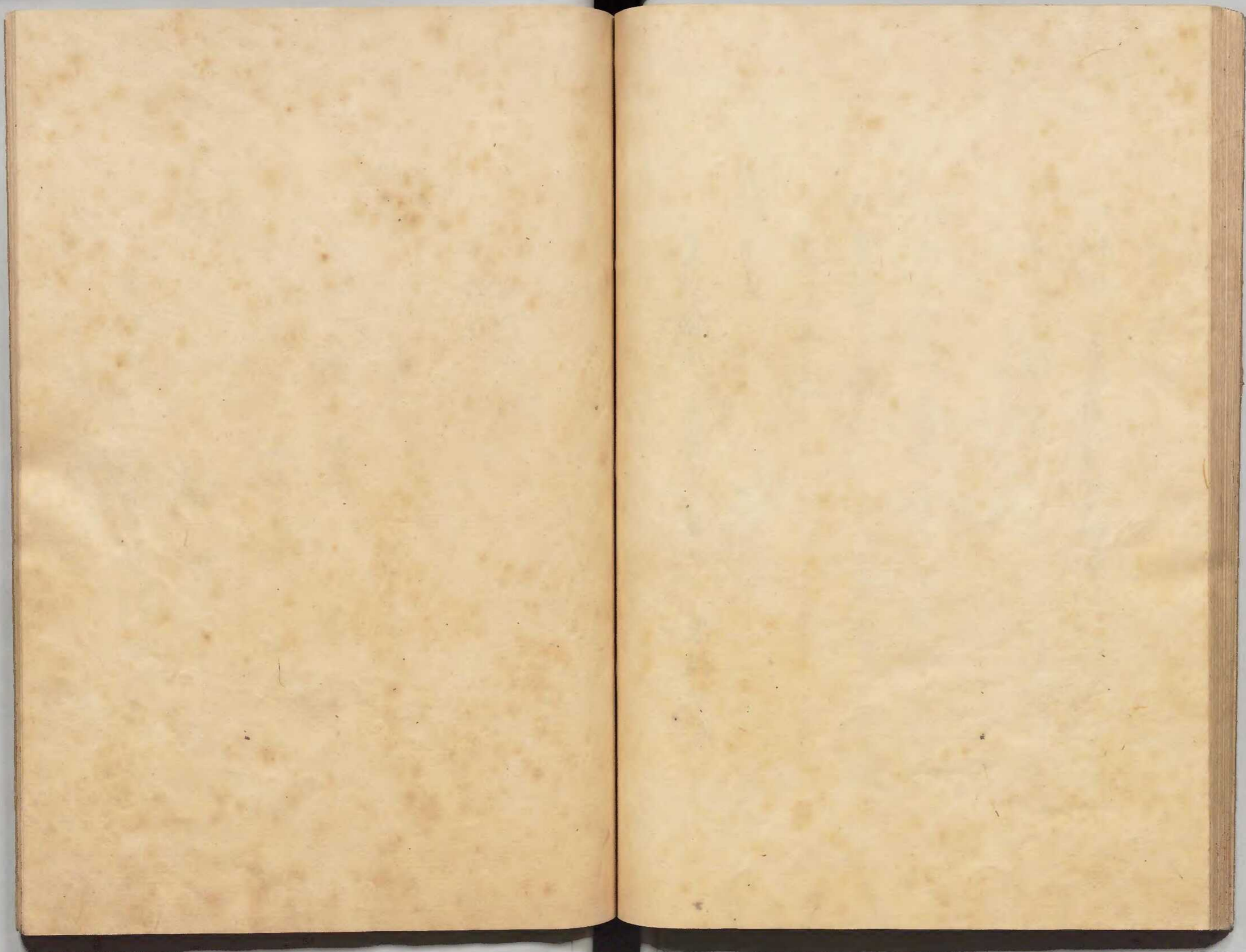
あり

寛永五年

將軍家とね福一とて大由番と

平頼家紋

飯田家紋丸の内一



信義

小佐子

武回左郎
射礼楯之
孫河守
お後と

忠頼

一宗次郎
曾此先經

坂東の車利
侍場の水

兼信

板垣三郎

有義

遠見四郎

長衛尉

信光

石和五郎

伴孫守

射礼楯五七お後

朝信

太高

墨坂の能

信忠

越三郎

信政

石和五郎

信時

五郎次郎

伴守

時綱

六郎

伊豫守

信宗

六郎 甲斐安藝両国の守護
文徳の人より世にまされり

信武

孫六

信具守

甲斐安藝両国の

守護

七月十九日 卒寸法名雷山恒云清浄具
院と号す

信成

次郎

利子補

甲斐守護

信春

三郎

信具守

十月晦、年と法名花常春云護國院
と号す

信満

次郎 安藝守

二月、甲州木賊山栖雲寺におお

自害と 法名明為光云長松寺と

号す

信重

三郎 刑部卿

権之と相續と

十一月、武官死と 法名切實成云

成就院と号す

信守

孫三郎 刑部卿 甲斐の守護

村礼権之とお後寸

享徳四年五月十日卒と 法名曹山
健云 能淨寺と号と

信介

利初少輔

永信

大膳

小佐子の元祖

信州河内郡子おかく村に成徳院

と号と

信行

宮内少輔

二十七歳に病死

信廣

新六郎

永禄十二年四月五日、後河内藤原山

おかく村に年廿五町、後河内藤原山

と号と

信房のぶ

新八郎

東照大権現のまへ用東御入承のまへのときに出

こゝろ 御供も

寛永五年正月廿九日病死六十二歳

信家のぶ

右源右

右徳院殿と稱して身を主と後

右軍家へ流し入る

信次

右助

元和三年五月に流し入る

寛永六年八月 御命をよりて小十

人組の組頭となる

信忠のぶ

右源右

乃軍家（はる）なる

このふ
家没
害
義

武田義信十代

● 信重

下男孫

武田果流

二郎 利正補 甲州下男孫小使

是よりしるしに 孫号とす

賢信

中務大輔

集

安氣やすき

集

上村かみむら

字雲村あぐらむらと号なづなと

集

源六郎げんろくろう

中村なかつむら

集

初子はつこ

東照大権現とうしょうだいこんげんと存福ぞんぷくと

天正十八年てんしょうじゅうはちねん小田原おだわら陣じんの時とき平定へいぜい針はり以も親おや者もの子こ孫そん一ひと休やすみ年とし忌い付つけかおと討う死し

信のぶ正まさ

云太いんた

法名ほうな玄孫げんそん

信由のぶよし

實ハ刑ア人捕とらグとら刑せア人捕とら子こヲをマまスす
信正のぶまさ 御命ごのみことヨよシしテてモも家いへトとシしテて

二十郎

右近院殿

將軍家ヨよシしテてシしテて

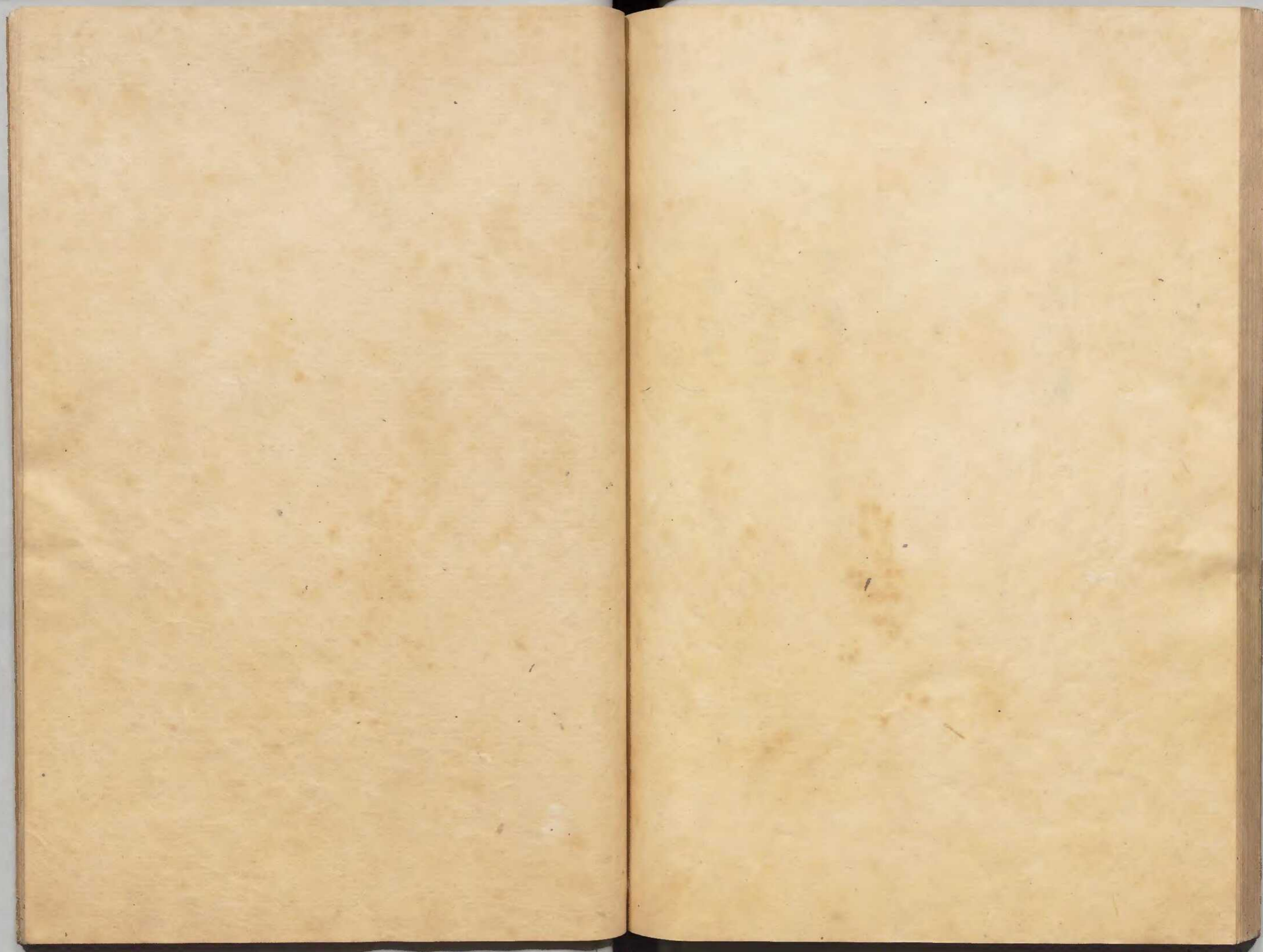
信定のぶさだ

小十郎

寛永十六年

將軍家トとシしテてシしテて

家紋割菱 楊寶



武田信義六代
● 信宗

安友

初りの巨海

六 甲斐守 安藤守

西国守護

信武

源六 隆興寺 法澤寺院と号と

信成

次郎

利久補

甲斐の守護

武績

十郎

梁原と号す

信通

公羽守

法名道深

信明

巨海公羽守

之則巨海は居るとこのゆゑに巨海と号す
家紋之生櫛

信重

民部補

信友のりとも

伊豆守

信重のりしげ

伊豆守

信方のりかた

平五郎

忠勝ただかつ

亮石史 上四三列

東照大権現とうしょうだいこんげんより河の水くわのみづのまた
法名ほふな淨心じやうしん

忠正

亮八郎 上四同前

大権現だいこんげんより河くわの水のみづのまた

果^長

長四子内取孫次女^つ他^々と御書
と勅し 病死^ハ十二歳^ハ 法名^ハ津^ハ徹^ハ

長^長

長五子伏見^ハにおお^ハく^ハ討死^ハ時^ハ十九歳

忠次

安^久政^市良^忠信^次 正^四武^次明

母^ハ安^久政^市良^忠信^次の^ハ母^方氏^名字^ハ
と^ハも^ハり^ハと^ハ安^久政^市良^忠信^次と^ハ稱^号し^ト

長^長十^十五^五子

名^ハ徳^院殿^ニは^シく^ハと^ハも^ハり^ハと^ハ安^久政^市良^忠信^次の^ハ御^書と^ハ勅^しと^ハ後

将^軍家^ニは^シく^ハと^ハも^ハり^ハと^ハ安^久政^市良^忠信^次の^ハ

忠利

太^郎忠^利 正^四武^次明

寛永十五年

將軍家と縁ゆかりなり御書院書まがらと勤つとむ

家紋かゝり友ともの丸まる

行長

東條

武回の苗裔八郎末流女房の
人なり

紀伊守 氏於御所 廿四侍

細川氏庶子也此のあつらひのとき
細川強列より三好の系と東條より
と河行長と是よりさういふ河内の子孫

の成は位后と秀吉天下の執柄のとき
秀吉よつふと後

東照大権現と稱しやる 殉命よら

行長判發し氏中卿は下は位也

六十五歳しく病死 法名大翁宗光

長頼

紀伊守 従五位下 七回山内

幼少の時より

大権現と稱しやる

大坂沙陣のとき 為母後と傳し

移骨と云くともより母後ち家臣潮田

ら左衛門右衛門是と見ゆび五人の

禮授しらの状いすまは二進あり

五十八歳しく病死 法名宗泉

長氏

十左衛門 七回山内

六果よりて初り

大於現と稱し其の之後

名徳院殿へ所入す其の

寛永二年

將軍家と稱し其の

安長

徳吉清

七回城川聚落

大於現へ九果の時正と云ふつて其の之後

名徳院殿

將軍家と稱し其の

寛永十四年六月十日病死感四十六

法名玄實宗彬

政長

侍立侍尉 七回城川に

寛永二年初め

名徳院殿と稱し其の

同十年

將軍家と^し禰^し一^しより^し御書^を送^り奉^りと^し勅^じ

之後^に 鈞命^をま^りわ^り小姓^を分^りと^しす

家^を没^す割^り菱^を

